



## 明治 150 年に思うこと 産官学民について

駒田 智久

近年、明治維新の位置付けについて従前の賛美一辺倒に近い論調に対して、維新という言葉の曲々しさは別として、異論が少なからず出ている状況にある。決して不味いということではなく、大いに論を戦わして欲しいと、山田風太郎の明治ものを楽しんだ一市民としては思う。

一口に言えば、明治維新はそれまでの江戸時代の地方分権社会から明治政府による中央集権国家への変身であったのであろう。その後、強力な中央政府のもと、列強に伍して生きていくために富国強兵・殖産興業を合言葉にして近代国家に向かって、「坂の上の雲」を見つめて一心不乱に励んできたということになる。その中で、基盤となるインフラ整備も、豊かでない財力のもとで懸命に進められた。その形態は、一時の民の動きもあったが、官主導というよりも、何事も官が担ったのであろう。構想・企画・計画から設計・施工に至るまで多くが官の直営で進められた。

土木の世界で「産官学」という言葉が何時から使われ始めたのか、不学にして知らない。

もともと、この言葉は一般産業界で産と学が技術開発やその実装に向けて連携する形態があったが、そのしかるべき進展を狙って官が関与・仲介する場面で「産官学連携」として出てきたように理解する。翻って、土木の世界では、公共事業という性格のもと、多少時代が下っても、官主導ということは変わってこなかった。実際に工事や設計を担う民の位置付けは時を経るに従って大きくなってきたが、事業の資金を握り、企画・計画と実施までを担う官の力は強大で、譲って表現しても、官と産による事業の遂行であった。その技術的な進展を支えるものとして、学の存在が当初から認識されており、ある時点から産官学という言葉が使われ始めたのであろう。すなわち、それらの連携ではなく、「産官学」による事業の「遂行」であったのである。

ここに新たに「民」が加わってくる。この民は市民・地域社会であるが、NPO等の団体をはじめとして個々の市民を含むサードセクターを意味しよう。この民の参加は「新しい公共」という言葉に代表される。平成 16、17 年に国の方針として打ち出された背景には、特に地方自治体における公共サービスの実施の困難さがあった。お金や人の絶対的な不足から止むにやまれず打ち出されたものと言えるが、市民自身のそれらへの関与に対する期待からも支持された。

このような背景のもと、平成 26 年 11 月に土木学会 100 周年記念出版の一環として「インフラ・まちづくりとシビル NPO」が出版された。そのサブタイトルは志も高く「補完から主役の一人へ」なるものであった。その暫く前に設立された CNCP と土

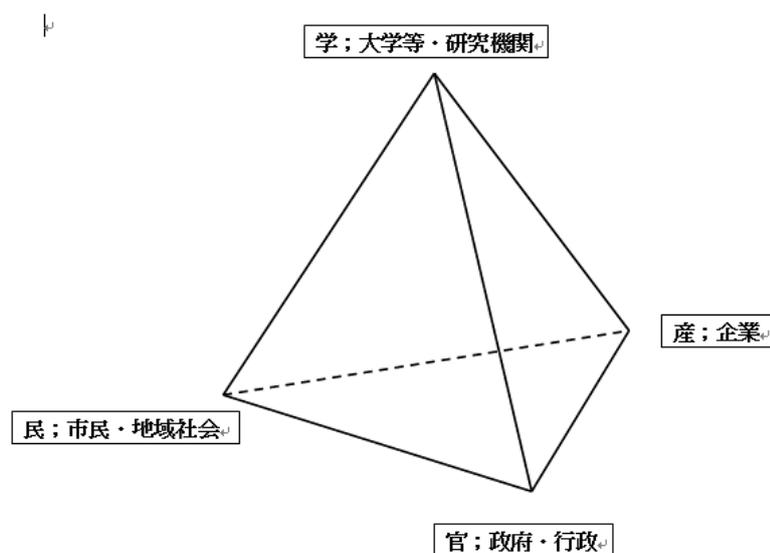
木学会の連携のもと、土木の世界におけるサードセクター活動の進展が図られてきたが、必ずしもその達成は十分ではないと言わざるを得ない。

時代のテーマであるインフラメンテナンスの世界においても同様である。国は「インフラメンテナンス国民会議」を設けて、その全国的な推進を図っている。7つの戦略の一つとして「メンテナンスへの市民参画」が謳われ、「産官学民によるインフラメンテナンスの推進」が取り組みの第1として挙げられた。テーマごとにその解決策を見出す場の一つとして「市民参画フォーラム」も設置されたが、サードセクターとしてのNPO等の団体は明確に認識されておらず、一方で現実の具体の達成も未だしの感が深い。

長いスパンで考えると、そもそも日本という国の存立が危うくなる人口減少という厳しい問題を抱えているが、ここ数十年のオーダーで考えた場合、防災等も含めてこの「民」の役割は増すことはあれ、減ずることはないと考える。その役割の増大に向けての更なる努力が必要であろう。

一方で、公共サービスに民が参加するに当たって障壁になっているのが、その執行システムではないか。それこそ130年近い前の明治22年に制定された会計法が、基本的にその骨格を受け継いで、憲法以上の「不磨の大典」として君臨し続けているのがその根幹のように見えるが、それはそれとして、公共サービス調達に関する柔軟な法整備がなされてきていない。この面について、サードセクターとして対外発信する役割は小さくないと考える。

なお、産官学民という言葉が定着しつつあることは大変喜ばしいが、それぞれの位置付けについて、少し言及したい。即ち、学は多少他と異なった存在ではないかということである。他の3者は力の強弱はまるで異なる(民が圧倒的に力弱い)とはいえ、事業の実施者・当事者である。一方、学は、現在の社会的な位置付けでは上記の事業実施者になることも可能かもしれないが、基本的には産官民の各者に対して遍く学術をもって恩恵をもたらすものと位置付けたい。すなわち、「産官民+学」のイメージである。天台宗に「一隅を照らす者、此れ即ち国の宝也」があると聞く。学は産官民のそれぞれに遍く光をもたらす貴い存在と考えたいのである。



土木における産官民+学の図